

## 『搜神記』における龍

— 古巢老姥譚をめぐって —

南 明 希

## はじめに

現在、私たちが目にするこの小説は、中国、六朝時代のものが最古とされる。六朝を含む早い時代の小説は、ほとんどが語られたものであるが、近代の小説とは性質が異なり、口語とはかけ離れた文語によって書かれている。話の背後にある情景描写や登場人物の心情といったものは、ほとんどが切り捨てられ、意識的に虚構を語ろうとする態度は見られない。そこからは当時の都会や農村の習俗について、歴史書には見られない資料を得ることができると言える。

この時代の小説は大きく二つに分類され、一つは、さまざまな怪異を記した「志怪小説」、もう一つはさまざまな人物の言行をエピソード風に記録した「志人小説」である。六朝時代、多くの志怪小説集が編まれた。「小説」とは「取るに足らぬ些細な説」という意味を持つ。それらの作品は当時の人々にとって、些細な出来事、歴史書の記載から漏れてしまった取りこぼしではあったが、記録をまとめたものとして、すべて重要な事実であり、歴史の一部とみなされた。<sup>注1</sup>

最も早期の「志怪小説」とされるのは「列異伝」だが、今は断片としてしか残っていない。この研究レポートでは、後の唐代伝奇に多彩な素材を提供し、影響を与えた志怪の代表

的な作品として『搜神記』を扱う。本書は文学史的に重視されるものの、その研究は、文学史上における位置づけや編纂過程など、この文献全体のあり方に焦点が当てられたものが多い。卒業論文において稿者は、その内容に踏み込んで研究してみたいとの思いから本書を題材として取りあげた。本稿は昨年度提出した卒業論文に修正を加え、まとめ直したものである。卒業論文では『搜神記』における龍と蛇について考察したが、本稿では龍についてのみ報告し、蛇については別稿にて報告することにした。『搜神記』には龍をめぐる逸話がいくつもあるが、本稿では巻二十に収載される四五五話、古巢老姥譚を詳細に分析する。その際、『芸文類聚』などの類書に引かれる記述を参照しながら、龍が多様に形を変え、化身として現れることを指摘し、その現れ方を具体的に検証してみたい。

## 一、『搜神記』について

『搜神記』は中国、東晋の干宝が著した志怪小説集である。『隋書』「経籍志」などによるとは三十卷あったとされ、二十卷本、八卷本、敦煌本という三種類が、現存する代表的

な版本である。現行二十卷本は神仙・方士・徴応・感応・再生・魘魅・妖怪・人間や動植物の怪異などに関係する四七〇余の説話を、説話の型で巻ごとに分類して収録されたものである。

『搜神記』を含め、六朝の志怪小説には一般に二つの傾向がみられる。そのうちの一つは、できるだけ人口に膾炙した話を取り込みながら集成されること。もう一つは、他の文献では長文で記述される話が、比較的簡素な文体で綴られ、不必要な修飾を削って、話の筋を記すことに重点を置いてつくられているということである。つまり、読んで鑑賞するためのものというよりも、一種の類書として、検索の便宜を図ることを目的としていたのである。『搜神記』は当時、多くの人々に読まれたと伝えられており、一方で啓蒙書としての役割も担っていたと考えられる。

著者の干宝は字を令升といい、その才能により召されて佐著作郎として朝廷に仕え、のちに関内侯になった。また元帝から認められて国史編纂の任務を兼任している。『晋書』に記された干宝の人柄によると、陰陽術数に関心があり、京房や夏侯勝の易伝を好んで調べたりしたという。他の著作には『春秋左氏義外伝』があり、『周易』や『周官』の注も著した。

本書を著述するようになった機縁は、干宝自身が、自分が体験した出来事に感じ入ったことだと伝えられる。『晋書』(卷八十二) 干宝伝には、以下のようにある。

宝父先有所寵侍婢、母甚妬忌。及父亡、母乃生推婢于墓中。宝兄弟年少、不之審也。後十余年、母喪開墓、而婢伏棺如生。載還、經日乃蘇。言、「其父、常取飲食与之、恩情如生。」在家中吉凶輒語之、考校悉驗。地中亦不覺為惡。既而嫁之、生子。又宝兄嘗病氣絶、積日不冷。後遂悟云、「見天地間鬼神事。如夢覺、不自知死。」宝似此遂撰集古今神祇靈異、人物變化、名爲『搜神記』。(宝が父、先に寵する所の侍婢有り、母甚だ妬忌す。父の亡するに及び、母乃ち生きながら婢を墓の中に推す。宝の兄弟年少にして、之れを審らかにせず。後十余年にして、母の喪に墓を開くに、婢棺に伏して生くるが如し。載せ還りて、日を経て乃ち蘇り、「其の父、常に飲食を取りて之れを与ふ、恩情生くるが如し。」と言ふ。家中に在りて吉凶輒ち之を語り、考校するに悉く驗せり。地中も亦た惡と爲ることを覺えず。既にして嫁して、子を生む。又た宝の兄嘗て病みて氣絶え、日を積みて冷えず。後に

遂に悟めて云はく、「天地を見鬼神の事を聞く。夢の如くにして覺めたり、自ら死ぬることを知らず。」と。宝此れを以て遂に古今の神祇靈異、人物の變化を撰集し、名づけて『搜神記』と爲す。

これによれば、母の嫉妬により、生きたまま父の墓に閉じ込められた侍女が十年ほど後に息を吹き返した。話を聞けば、死んだはずの父のおかげだという。侍女は吉凶を言い当てる能力を備え、やがて嫁いで子を生じた。また、干宝の兄が病気で絶命した時も侍女同様、再び目を覚ました。古今の天地神々にまつわる不思議、人や物の變化に関わる出来事を搜し集め書物とし、『搜神記』と名付けたという。

小南一郎氏によると、干宝は「当時の社会の中における諸事情を理解し、位置付けるため」に記したという。<sup>註2)</sup>『晋紀』のような国史には書けなかったことを『搜神記』に収録したのではないかと考えられ、また、その著作態度は『搜神記』においても、いかにも歴史家らしい。干宝自身、序文の中で「綴片言於殘闕、訪行事於故老、將使事不二迹、言無異塗、然後爲信者、固亦前史之所病(片言を殘闕に綴り、行事を故老に訪ね、將に事をして迹を二とせず、言をして異塗無からしめんとし、然る後に信を爲す者、固より亦た前史の病む所

なり」と、事象一つ一つを根気よく丁寧調べ上げる必要性を述べている。『搜神記』に民間伝承が数多く収録されていることは、干宝がこうした態度を守り続けたことのひとつの証明と言えるだろう。<sup>(注3)</sup>

## 二、巨魚と蛟龍

龍といっても数多くの種類が存在し、姿、性質は各々異なる。そして、その描かれ方において、必ずしも龍の姿のままとは限らないのではないかと考える。ここでは、龍がさまざまに形を変えるさまを、『搜神記』巻二十の四五五話、古巢老姥譚を取り上げ、具体的に検証していくことにする。本文は次の通りである。ただし、説明の便宜上、この話の全体を前半部分①と後半部分②に分ける。<sup>(注4)</sup>

①古巢、一日江水暴漲、尋復故道。港有巨魚、重万斤、三日乃死。合郡皆食之、一老姥独不食。(古巢、一日に江水暴漲し、尋いで故道に復す。港に巨魚有り、重さ万斤、三日にして乃ち死す。郡を合はせて皆な之れを食らへども、一老姥独り食らはず。)

②忽有老叟曰「此吾子也。不幸罹此禍。汝独不食、吾厚報汝。若東門石龜目赤、城嘗陷」姥曰往視。有稚子訝之、姥以実告。稚子欺之、以朱伝龜目。姥見、急出城。有青衣童子曰「吾龍之子。」乃引姥登山、而城陷為湖。(忽ちに老叟有りて曰はく「此れ吾が子なり。不幸にして此の禍を罹る。汝独り食らはず、吾れ厚く汝に報いん。若し東門の石龜の目赤ければ、城嘗に陥せん。」と。姥日ごとに往きて視る。稚子有りて之れを訝り、姥実を以て告ぐ。稚子之れを欺き、朱を以て龜の目を伝ふ。姥見て、急ぎて城を出づ。青衣の童子有りて曰はく「吾れ龍の子なり。」と。乃ち姥を引きて山に登り、而して城陥して湖と為す。)

結論からいえば、稿者は、この逸話には三匹の龍が描かれていると考える。「巨魚」、「老叟」、「青衣童子」がそれぞれである。描かれ方から、三匹とも種類が異なると思われる、以下、各々について分析していく。前半部分①の概略は以下の通りである。

①古巣県である日、長江の水が急に溢れ出し、暫くしてまた元の流れに戻るといことがあった。溝に巨大な魚がいて、重さは一万斤もあり、三日たつて死んでしまった。郡民はこぞつてこの魚を食べたが、一人の老婆だけは食べようとしなかった。

まず、第一の龍は「巨魚」として姿を現す。この「巨魚」は龍の化身であり、蛟龍に該当すると考えられる。蛟龍は、多くの場合、鱗があるものと説明され（『芸文類聚』鱗介部「龍」所引「広雅」など）、「孫卿子曰、積水成川、蛟龍生焉（孫卿子曰はく、積水川を成せば、蛟龍を生ず）」（同じく『芸文類聚』鱗介部「龍」所引）ともいわれる。また『芸文類聚』鱗介部「蛟」には、「説文曰、蛟、龍属也。魚満三千六百年、蛟為之長。率魚而飛去（説文に曰はく、蛟は、龍の属なり。魚三千六百年に満つれば、蛟之が為に長たり。魚を率いて飛び去る）」とある。さらに蛟龍は、しばしば長江に住む。『漢書』武帝紀によれば、元封五年冬、武帝は巡狩（天子が各地を巡って視察する）に出かけ、「自潯陽浮江、親射蛟江中獲之（潯陽より江に浮かび、親ら蛟を江中に射、之れを獲たり）」という。以上のことからすれば、蛟龍は龍の

中でも、特に魚や水、川との関わりが深く、『搜神記』四五五話の古巣老姥譚の冒頭に登場する「巨魚」とは、蛟龍の變化した姿だと考えられる。そして「港有巨魚、重万斤」というのは、川にいたはずの蛟龍が川の氾濫によってできた溝に取り残された様子を描いたものと解釈できるだろう。

### 三、応龍、黄龍と青龍

『搜神記』巻二十、四五五話、古巣老姥譚における第二の龍は、老婆の前に現れた老人として描かれている。ただし、この龍に該当するものには応龍と黄龍との二種が考えられる。以下に後半部分②の概略を掲げ、このように考えられる根拠を確認していく。

②不意に見知らぬ老人が現れ、老人のいうことには、「その魚は私の子だった。」という。さらに、この魚を食べなかった老婆にお礼を言つて、あることを教えた。それは町の東門にある石の亀の目が赤く変わったら、この町が陥没するという予言であった。老婆は日ごとに出掛けて様子を見てみると、子供がいてそれを不思議

議がるので、老婆は本当のことを話してやった。子供は話を聞いて面白がり、老婆をだましてやろうと思つて亀の目に朱を塗り付けた。老婆はこれを見るや、急いで町を出ていった。するとそこに青い服を着た童子が現れて「私は竜の子だ」と言った。老婆の手を引いて山に登つたところ、町は陥没して湖になつてしまつたという。

②において、老婆の前に現れた老人が応龍だと考えられる根拠の一つは、応龍が蛟龍の成長後の名称だと考えられるからである。『述異記』には「水虺五百年化為蛟、蛟千歲化為龍。龍五百年為角龍。千年為應龍（水虺五百年にして化して蛟と為り、蛟千歲にして化して龍と為る。龍五百年にして角龍と為る。千年にして應龍と為る。）」という記述がある。そこで四五五話の場合には、応龍が老人に姿を変えて、やがて時が経てば自らと同じ経路を辿つて応龍となるはずだった蛟龍を息子と称し、人間に殺された恨みを晴らそうとしていると解釈してみたい。

また、『初学記』「龍」には「山海経曰、応龍処南極、殺蚩尤与夸父、不得復上、応龍遂在地。故下教早。早而為応龍状、

乃得大雨（山海経に曰はく、応龍南極に処り、蚩尤と夸父とを殺し、復た上るを得ず、応龍遂に地に在り。故に下教早す。早して応龍の状を為せば、乃ち大雨を得たり）」とある。帝王に仕えるものとして殺生を行つたために、邪氣を帯びて神々の住む天に昇ることができなくなつてしまい、そのため地上は雨が降らず、しばしば早に陥つた。そこで応龍を象つてまつれば大雨が降つたという。こうした記述からすると、応龍は、雨を降らせる力を持ち、さらには敵対するものを殺したり、懲らしめたりする激しい気性を持つ存在として認識されていることがわかる。四五五話においても老人は都市が陥没して湖になることを予言していることから、水をつかさどる存在であつたことがうかがわれ、「吾子」を独り食べなかつた老婆にのみに陥没の情報を与え、結果として老婆以外の者を救おうとしなかつた姿勢には、応龍の属性としての気性の激しさを見ることができらるだろう。

一方、老婆の前に現れた老人が黄龍だと考えられる根拠は、黄龍と青龍との関係性にある。『芸文類聚』祥瑞部「龍」に「瑞応凶曰、黄龍者四龍之長、四方之正色、神靈之精也（瑞応凶に曰はく、黄龍は、四龍の長、四方の正色にして、神靈の精なり）」という記述があり、黄龍と青龍との間には恐ら

くは中央に位置して四龍を統括する黄龍と、四龍の一つで、恐らくは東方に位置する青龍といった、上下関係のごとき關係が存在すると考えられる。四五五話において、老婆の前から老婆を導いた童子を青龍と捉えると、「吾子」である巨魚を食べなかつた老婆を救うために、黄龍である老人が使用して青龍である童子を老婆のもとに寄越したという背景を想定することができる。

ここで童子が自らを龍の子と名乗ったことから、童子が第三の龍であることは明らかであるが、それが青龍だと考えた最大の根拠は、この童子が「青衣童子」すなわち「青衣」を身につけていたことにある。『芸文類聚』鱗介部「龍」には、「河図曰、黄金千歳生黄龍、青金千歳生青龍、赤白之金千歳各生龍、玄金千歳生玄龍（河図に曰はく、黄金千歳にして黄龍生じ、青金千歳にして青龍生じ、赤白の金千歳にして各おのの龍生じ、玄金千歳にして玄龍生ず）」とある（『初学記』「龍」にも同様の記事が見える）。恐らく「青衣童子」の「青衣」は「青龍」の「青」に通じ、従つて、「青衣童子」とは必然的に「青龍」の化身と考えられよう。さらに、その点を確認した上で、改めて前掲の『芸文類聚』祥瑞部「龍」所引

「瑞応図」の記事を見てみれば、先にも言及したように、五行説に基づいて、中央には黄龍が据えられ、各方向にはそこを守護する四龍（東は青龍、南は赤龍、西は白龍、北は玄龍）が存在する。四五五話においては、都市陥没の前兆が現れたのが「東門」である点からも、東を司る青龍を連想することができるだろう。

### おわりに

以上のように『搜神記』四五五話、古巢老姥譚で描かれる老人に該当する龍には、可能性として二種がある。応龍と黄龍のどちらが老人として描かれているかは定かではない。数ある伝説や神話の中で、応龍が龍の帝王とする説もあれば、応龍の年老いた姿が黄龍であるとすると説もあり、ここではどちらか一方に断定することは難しい。しかし、前述した「巨魚」として描かれる蛟や、後に登場する青龍との繋がりから、「老叟」が龍であると捉えるのが妥当だと考えた。

ここまで第二節、第三節に渡つて考察してきたように、「巨魚」、「老叟」、「青衣童子」が龍であると前提とし、各々の描かれ方を考察してみると、ある特性が浮かんでくる。蛟

龍は自身が魚と化したことで豊富な食料という、ある種の恩恵を郡民にもたらした。しかし一方で、伝えられる諸伝承の中では排除すべきものとして扱われる。加えて、応龍においても、郡民に向けた祟りを起こした張本人である一方で、老婆の命を救うことで恩返しをしている。両者とも二面性を持ち、龍が神として吉報や凶兆を示し、人々から崇められる対象として扱われるだけでなく、禍そのものを生み出す生き物でもあるということが分かった。

このように多様な種類に分化し、それぞれが相反する性質を持ち合わせているのは、龍が神のごとき、あいまいな存在だからではないだろうか。『搜神記』四五五話において、魚や人に形を変え、予言をして老婆を救うといった出来事は、人間が触れることのできない領域、人間ではとうてい力の及ばないことを、龍が成している。龍が古来より現代に至るまで、「皇帝のシンボル」や「国家の象徴」として扱われるのは、龍が神聖なものとして捉えられている証であり、神と同様に、その存在が明確でないが故に、姿形、性質において様々な言い伝えがあるのだろうか。

注

(注1)

以上、「小説」については、前野直彬『中国小説史考』(一九七五年、秋山書店)、松原明・佐藤浩一・児島弘一郎『教養のための中国古典文学史』(二〇〇九年、研文出版)等を参考にした。

(注2)

引用の小南一郎氏の言は、佐野誠子氏の研究報告「五行志と干宝『搜神記』」(二〇〇〇年十二月八日於東京大学)に対するコメントである。このときの研究報告の模様は、「志怪と伝記—小南一郎先生の研究をめぐって—」(『東京大学中国語中国文学研究室紀要』第四号、二〇〇一年四月)に採録されている。

(注3)

以上、「搜神記」および干宝については、高橋稔『中国説話文学の誕生』(一九八八年、東方書店)、高西成介「六朝文人伝—『晋書』(巻八十二)干宝伝—」(『中国中世文学研究』第三十三号、一九九八年一月、白帝社)等を参考にした。

(注4)

『搜神記』の本文は、先坊幸子・森野繁夫「干宝 搜神記」(二〇〇四年、白帝社)による。作品番号も本書による。訓読についても本書を参考にしたが、私に直した箇所がある。

※以上のほか、本文の引用に際しては以下のテキストを使用した。  
 『漢書』：中華書局本。訓読については、和刻本正史(一九七二年、汲古書院)を参考にした。『芸文類聚』：歐陽詢撰 汪紹楹校『藝文類聚』(一九七二年、中文出版社)。「初学記」：徐堅『初学記』(一九七六年、台北 鼎文書局)。「述異記」：和刻本漢籍隨筆集(一九七七年、汲古書院)。